



宇根豊さんと映画「田んぼ」を観て、 農と自然を語る会



宇根豊さん

一杯のごはんには、赤トンボが何匹付随しているのでしょうか。オタマジャクシはどうでしょうか。キンポウゲは何本？ 涼しい風は何秒くっついているのでしょうか。

私たちは米は生産物、メダカやホタルは生産物ではないと、平気で分別しますが、それはまともな価値観でしょうか。

いつのまにか、ごはんと自然環境がつながっていることが忘れられています。両者を結んでいる百姓仕事が見えなくなったからです。

こうなると、人間が自然に惹かれる理由もわからなくなるのは無理もありません。（宇根豊さんのメッセージ：システムブレン社のHPより）

日時：平成 21 年 12 月 19 日（土）

13:00～16:00（開場 12:30）

場所：尼崎市立小田公民館（JR尼崎駅北すぐ）

プログラム：1. 「田んぼ」上映会（約 60 分）

2. 講演「農のほんとうの価値」

宇根豊（農と自然の研究所代表理事）

3. フリーディスカッション

資料代：会員・学生 500 円 会員外 1000 円



映画「田んぼ」のチラシ

はるか昔から、私たち人間と共に生きてきた生きものの生命が続かなくなるような環境変化は、いずれ私たち人間の安全で豊かな生活をも脅かすこととなる。

田んぼの中の生きものから始まり、次第にいろいろなものが見えてきます。田んぼから水路へ、水系をめぐる旅、そして大空を翔る渡り鳥。トリ・ムシ・サカナの視点から環境・開発の有様が見えてきます。

鳥・虫・魚・人は「田んぼ」でつながっているのです。

（映画「田んぼ」のチラシのコピー拡大）



主催：NPO 法人 近畿水の塾（URL：<http://www.geocities.jp/npokinkimizunojuku/>）

共催：農・都共生ネットこうべ（URL：<http://noutu.net/kobe/>）

映画「田んぼ」の【あらすじ】

映画の主演は日本と韓国の子どもたち。

空間を超え、各国を結ぶものは、田んぼの中の虫であり、マナヅルやガンなどの渡り鳥、そして何よりもアジア・モンスーンが育む稲作文化です。映画は、水田としてはじめてラムサール条約登録湿地に登録された宮城県蕪栗沼周辺のふゆみずたんぼから始まり、日本各地の田んぼ、そして韓国の田んぼと湿地をめぐる。日本とアジアの子どもたちが実際に田んぼに入り、肉眼で確かめた生きものたちの発見を通じて、アジアにおける水田農業の共通性を確かめることが、映画全体を貫く太い幹となります。農業・経済・教育といった、子どもを取り巻く人間社会が生きものの視点から垣間見えてきます。(NPO 法人生物多様性農業支援センターホームページより) 予告編 <http://www.youtube.com/watch?v=cK2rUkTKghk>



【尼崎市立小田公民館の場所】

〒661-0976 兵庫県尼崎市潮江1丁目11-1-101

(ラ・ヴェール尼崎1・2階)

TEL:06-6495-3181

JR神戸線「尼崎」駅から徒歩約2分。



近隣の居酒屋「大黒」にて懇親会を予定!(16:30~、参加費約3500円)

<宇根豊(うねゆたか)さんの紹介>

長崎県生まれ。福岡県農業改良普及員となり、1978年から「減農薬運動」を提唱。1983年に減農薬米の産直に初めて取り組む。虫見板を手に農薬散布に対抗する技術と言葉を田んぼの中からあみだすことを徹底的に支援。著書に「田んぼの学校」「減農薬のイネづくり」(農文協)ほか。(日本農村カデザイン大学HPより)

~僕(福廣代表理事)が、宇根豊さんに初めてお目にかかったのは、十数年前福岡県二丈町での事。宇根さん、当時まだ県の職員だったと思うが、「百姓」を連発し、ゴムぞうり素足で、田んぼにどんどん入っていく人に、えらく感動を覚えたのを思い出す。百姓は蔑称ではなく、百の職をなせる尊称なのだ。その時の会で、豊岡のあの「35年前、皆で暮らしていた」のクウノトリポスターの初見だった。その後、農都ネット神戸の会で、日本の自然は田んぼが作る。百姓仕事の「非金の部分」熱く語られるのを聞いた。終には、田んぼの生き物全種5470種を特定すると言う偉業をなし、田んぼと内外境界のない一体となって、百姓哲学者となった人である。僕は宇根さんに、安藤昌益の再来を見ている。

申込書(FAX 072-839-9124, E-mail razgriz0ace@yahoo.co.jp 事務局;真下)



1. 上映会 出席・欠席
2. 懇親会 出席・欠席・考え中

どちらかに をお願いします。なお、懇親会参加者は、12月12日までに申込みをお願いします。

氏名:

住所:

TEL/FAX:

コメント(近況等):